涅槃經と日本精神

井上右近

「世間虚假」といふ語句と「唯佛是眞」のそれとは涅槃經に散見するところであるが、聖德太子は「世間虚假唯佛是眞」の大御言葉を吾等にしめし遺されたのである。

世間の虚假と痛感せしむものは唯佛是眞なるが故である。また唯佛是眞と歡喜信樂せしむる絶對の機緣は虚假世間である。

世間虚假唯佛是眞、それ故にそれはまことに吾等にとつてたぐひなき大御言葉である。聖德太子の吾等にのこしおきましゝ大御言葉であり、卽ちそれは祖國日本の無上敎令である。

タチバナノオホイラツメはこのこの御言葉によつて聖德皇をそのなきあとにしぬびましゝといふそれはタチバナノオホイラツメの佛敎であり生命感であつた。親鸞は鎌倉時代より聖德皇をかへりみて「和國の敎主」と奉讃してしまつたのである。

和國の敎主—その聖德皇の御生涯はまことに申すばかりもなき悲劇であつた。それはこゝに縷述するまでもなく史家の語り傳ふるところによつて明かである。

聖德太子はその御代の天皇の御ために勝鬘經を講じまた朝廷使臣のために維摩經法華經を講義しましましたのである。しかしその御妃に傳はつたのは涅槃經より來てをる世間虚假唯佛是眞の御格言であつた。

涅槃とは滅、すなはち吾等の死である。涅槃經

は釋尊の死より生れた言葉であつた。歐州諸民族の文明文化が受難より復活への試練であることを吾等が想像し得るのは釋尊の死が生命の源泉となつて興起した東洋文明あるがためである。しかしながら、日本に聖德皇の出現がなかつたならばそれを今味はふことはできないのである。更にそれをそうと氣附かしむるのは親鸞の言葉である。「よき人のおほせをかうぶりに信ずるほかに別の仔細なきなり」――

少しくこゝに學匠沙汰を敢てしやう。涅槃經にこういふことが述べられてある。『如來則有二重涅槃。一者有爲。二者無爲（釋尊には二つの死に樣があつた。一つは思想的の滅のこゝろで、他は無窮の生に入ることである。）有爲涅槃。無常樂我淨。無爲涅槃。有常樂我淨（思想的に滅のこゝろを味はふことがあつても、それですがしく自由になりきることは出來ぬが、無窮の生に渾融せしむればそれこそすがしく自由のものである。）

涅槃經に有爲涅槃といふのは傳說によれば三十五歲のときに菩提樹下に端坐瞑想せし時をいふのであり、無爲涅槃とは八十歲に及んで淳陀の饗せし食物に中毒して遂に沙羅雙樹の下に瞑目せしめし時をいふのである。今はその傳說を反覆するのが目的ではなく、それを吾等のみをや親鸞はいかに攝取せしかをうかゞはんとするのである。

『敎行言證』には右の涅槃經文を引用するに次の如く示されてゐる「有爲涅槃は無常なり。常樂我淨は無爲涅槃なり。常人あつて深くこの二種（信、戒）の戒ともに因果ありと信ぜん、この故に名づけて戒となす。戒不具足とはこの人、信戒の二事を具せず、所樂多聞にしてまた不具足なり。」已上は有爲無爲のところは勿論、戒不具足についてもそれは全くみをやの思想にとりいれられたことがよみちがひと見らるべき國語化を伴つたことを見遁

し得ぬのである。教行信證は漢文の形式をとるのであるが。日本人吾等が漢文をよんで切斷しゆく語感は不斷の生成連續に代へられた事を感ぜしむる、それを今國語化といつたのである。この國語化によつて自然に文學も取捨增減せられてそこに不可侵犯の生命的威嚴は示さるゝのである。漢文を其まゝにして單に日本式の訓讀法の許すかぎりの假名遣ひによつて轉讀延書して然も日本人のいはうとする所が損はれぬ場合もあるが、そうでない場合が多いこの言語的自覺をしめしたのは親鸞に代表さるゝ鎌倉時代の文献一般であつた。しかし今それを考證してはゐられぬのである。直ちに涅槃經より來れる信戒二事を闡明すべきである。

信戒二事といふのはわかりやすくいふならば眞俗二諦といふことである。事といふのは事實であり、諦といふのは分析概念である。それを綜合すれば「人」である。親鸞は「常樂我淨あり」云々を「常人あつて」とよみなほす、そこには天上の極樂よりも、內心のまた現實の痛感がともなふのである。すなはちそれは聖德太子の世間虛假唯佛是眞の大御言葉がたゞちにタチバナノオホイラツメに傳へられた事實を直指するものである。

聖德太子は吾等の警戒すべきは世間虛假であり吾等の信ずべきは唯佛是眞であると示しましたのである。釋尊が「われ世に住せむもこれに異らず」と呼びかけらるゝ如く思惟して戒律も重んじた正統派と「眞實の利」を釋尊出現の本懷と信受した革命派とは大藏經を構成せしめたのであらうが、つまりは信戒二事である。

多くにはわたらずこのそこばくの思想について考へ合すならば、氣づかしむることのみである。戒とは英雄崇拜による道德であり、信とは煩惱成就の「人生宗教」である

道德と宗教と、吾等の到達するところはそのど

ちらかである。しかしそれは二つのものではなくたゞ一つのことを云ひつのつて二つに分けねばならなくなる悲痛人生にきざす分析概念である。山鹿素行は道德の上から聖德太子を尊崇して「上古に聖德太子一人異朝をたふとびす、本朝の本朝たることを知れり」といつたが、親鸞は敎育の上から聖德太子薨去の際の一般民衆と同じやうの思ひにかへて「父のごとく母のごとし」とたゝえまつつたのである。

印度には印度の戒律はあつたが、日本には日本の戒律が示された。それが聖德太子畢生の御事業であつた。聖德太子は現世に秩序を支持しやうとはせられなかつたからその生命秩序は無窮の大海のごとく仰がるゝに至つた。まことに秩序を保ち得た人は上古に聖德太子ひとりその代表的人格にましますのである。人生は「不可思議」であると親鸞の示せし如く、現世に於て綜合し得ぬ悲痛人生である。たゞすべてを「親鸞一人」に感受せしめて反映せしむる暴風駛雨の現實あるのみである。この暴風駛雨の現實內容を侵犯せしめざる究竟の威嚴は人生秩序であり國民的秩序である。それを親鸞は涅槃經を引いて「慙愧あるが故に父母兄弟姉妹あることをとく」と示す。この人生秩序すなはち君臣父子夫婦兄弟の國民的秩序にのみ言葉はあり國語は受持せられゆくのである。「無慚愧は名づけて人とせず、なづけて畜生とす」といふのはこの秩序――單純究竟の秩序をのぞくならば吾等の生活內容は動物一般のそれと異るところもなく、否動物よりも劣りはてた糞溺心の堆積にすぎぬといはるるのである。

しかしながらこの糞溺心の堆積、動物一般の生活の外に我等の實際生活はなく、それゆえに羞恥といふこと、慚愧といふことは、いづれもこの醜惡にともなふ人生秩序の嚴肅感である。この人生

秩序すなはち戒といはるゝものは内心歡喜の外的試練である。すなはち信とは「やむを得ざる言葉」である。わが身のための外的試練が他にとつては信と仰がるゝのである。それゆえに有信と無信とやうに定まつてゐるのではなく直接に感ずるところより宇宙は開闢せられ人生は創造せらるゝのである。それが戒であり信である。世間虛假唯佛是眞である。それも「佛、世にましませども、はなはだまうあひかたし」といふ直接必至の希有歡喜について思ひ出す言葉、「やむを得ざの言葉」である。

最近支那を經て日本に來朝し約半歲の後合衆國に向つて渡航し去つた一英人は最近日本の一雜誌に次の如く翻譯せしむる一文を投じた

「日本は支那と異つて宗教的の國である。支那には或教條が眞理であることの立證せらるるまでそれを疑つてゐる。日本人はそれが虛僞だと證明されるまで信じてゐる。私はミカドは神であるといふ意見に對する反證のあることを知らぬ……佛教は世界的な宗教であるにしても、日本佛教は英國教會と同じく甚しく國民主義的なものである(1)

「米國人は米國の文明を以て世界に冠たるものと考へてゐるから彼等は支那人を强壯な基督信者にしてしまふであらう。(2)

「日本に始めて西洋の侵略主義を感知させたのはペルリ提督の率ゐる合衆國の艦隊であつた。間もなく白人に對するには、これに服從するか、又は自分の武器で之と戰ふかの外に道のないことが明かとなつた。日本は第二の道をとつた。そして獨逸人に仕込まれた近代陸軍、英國に倣つた近代的海軍、米國から齎した近代機械組織、及び西洋全體に倣つた近代的道德を發達させた。英國人の外は何人も是に戰慄して日本人を『黃色の猿』と呼んだ……西洋が日本を認め出したのはたゞその

軍備のためばかりである。(3)

「日本の道德は功利主義でなくて强烈な理想主義である。(4)

「米國人は藝術を亡ぼしてその代りに整頓をもたらす。(5)

「現行の經濟組織の下に於ては亞米利加、カナダ及び濠洲に於ける低廉な亞細亞勞働者の競爭は其等國々に於ける白色勞働者にとつてかなりに有害である。けれども社會主義の下に於ては精勵な熟練勞働者が人口の稀薄な國々に流入することは何人にとつも明白に利益である……米國及び英領に於ける黃色勞働者の場合は資本家制度によつて生せられた人爲的利害の衝突の最も不幸な例の一つである」(6)

以上六項にわたつて引用した英人の意見はそれが日本の學者評論家にさへ氣附かぬ公然の事實を率直に形容せしめて居る現日本の東西帝國大學の學者を始め文壇思想家は一樣に日本人は現世主義で日本に哲學が生れなかつたといひ觸らしつゝあり、たまたま哲學を東洋にもとむるものは禪宗の語錄くらゐのものである。この自卑屈從思想をもつて獨逸哲學を研究考察してもそれは無益の閑事業である。日本には聖德太子、親鸞の、哲學ならざる原理的人生觀が顯彰せられつゝあることを吾等は幸慶とせねばならぬ。英人が强烈なる理想主義とさすのは獨逸に對する感情を渾融せしめつゝあることも否みかたいのであるが、日本の道德は功利主義でないといふのは英國人の敏感として敬意を表せしむべきものである。

またその英人の觀察の見地はいはゆる國際的社會主義と稱するものであるが、この見地よりして人道的普遍遺憾事としての排日問題を解明しつゝあることは吾等の感謝に價する言論でる。こゝに吾等は對外社會主義對內國民主義の自覺を喚起す

るに躊躇せぬのである。その英人の所論をその主張に關係なく全體よりして共鳴せしむるものは唯對外社會主義對內國民主義あるのみである。それを「東天皇敬問西皇帝無恙否」と修辭せさせたまひし聖德太子に溯源して味はふなればそれは「世間虛假唯佛是眞」の確信あるのみである。

當時翻譯官(ヲサ)の政治的專橫を制して最新最銳の學術を以て天下に君臨しましませしは聖德太にましましたのである。それはヤマトタケルノミコトの「はやく吾を死ねとや思ほすらむ」との御精神とワカイラツコノミコトの漢學興隆の御事業との發展であつた。すなはち日本人にとつては外交の外に社會主義はなく家庭的生活の外に國民主義は存しないのである。それを英人が「强烈な理想主義」と名づくるのは勝手であるが、哲學や理想主義の餘裕なき理想主義は吾等個人にとつては現實主義とよりいひようもない。

建築學者はいふ日本の建築に煖房裝置のないのは古代日本民族は南洋より移動し來つたことを證明するものであるといふのである。ジャバ島のボルボドールの佛蹟の寫眞に示さるる佛像彫刻は推古朝の藝術的作品なる法隆寺四十八體佛の如くまことに笑ましげの姿勞を示してゐる。日本民族の主要々素は熱帶の樹下に假眠を貪るよりも寒冷の地に向つて移動したのであらうか。かく想像せしむるも現日本國民が太平洋に向ひつゝ東洋文明を背負ふて立つ現實現勢に外ならぬ。

一切論理の資料を人生經驗に綜合統一して「あまねくたゞしき心を行じて、あまねくしたしきこころざしをひとしく」せしめた釋尊の涅槃による再度の刺戟の脈動移動せしはこは親鸞の「人生宗教」であり吾等の現實無上教令への信順である。しかしながら某氏の言葉の如く「釋尊は肉を敵としたが親鸞は肉を友とした」いちじるしき對照が

ある。吾等現實を友とするものにキリスト教の修道院生活に類似する僞隱遁主義は自然に墮廢するであらう。親鸞の遺弟は先づ現日本國民吾等である。そう信知信樂することが救濟し得られざる人生に於ける唯一の大道であり基督教徒の示す如き僞善を淨化することに於て何よりも人道的悲痛平和の光輝とならう。

涅槃經に「唯觀衆生。有慚愧者。若有慚愧。則使慈心」とあるを親鸞は「ただ衆生の善心あるものをみそなはす。もし善心あらば則ち慈心ならしめたまふ」と讀みきはむるのである。慚愧の次に來るべきものは善心である。善心の生ずるによつて慚愧あるを證するのである。唯佛是眞だけを知つて世間虛假を痛感しないといふことはあり得ぬのであつて、世間虛假を味識せぬのにどうしてどこに唯佛是眞と信受し得やうか。世間虛假に先づ目醒ましその現實內容よりもその史的文化恩德に思ひいたるならばそれが唯佛是眞でありそこに現實內容も不斷に流轉して時と共に形をとゞめぬやうになるであらう。その開展こそ我等千歲一過の個人の滅であり超個人的生命開展の無窮である。「つみをけしうしなはずして善になすなり」とみをやはいつた。その友の言葉を注釋する時に、

一支那僧は「禪律如何是正法。念佛三時是眞宗」とやうに斷片價値を肯定して質疑の形式より生命價値を摸索しやうとしたが、親鸞は「禪律いかんぞこれ正法ならん。念佛三昧はこれ眞宗なり」と否定し肯定し絕對の代ふべからざる機緣として對抗完全の思想要素を攝盡し顯示するのである。英人のみたる支那日本の思想的對照はこゝにも示さるのである。しかし今はそれも過去のことである日本とは吾等の內心の歸依對象である。一とたび支那人を思ふとき吾等國民の生命防護の不斷進展が悲痛平和の一線に於てのみ一視同仁の慈光を援

げ得ることを確信せしめらるゝ。まことにそう思ふと學匠沙汰はしてゐられぬのである。

「信順不逆」といふ涅槃經の言葉は親鸞によつて「不逆に信順」すと讀みつゞけられてしまつた。不逆を信順に先だゝしめて不逆に信順すといふ。吾等の「正法」とみとめ得るものはたゞこの一時である。ひとしくひとへに不逆を待たしむる、それを「時」となづけ「史的開展」といひ生命とすべしめ「信」として支持せしむるのである

まことに聖德太子はめづらしき生活をはじめましましたのでないことに思ひ到らう。遂にそこにすべてを歸しよろこばしめし親鸞の最後の著述といふべき聖德皇太子奉讃をかへりみる時である。

家庭生活と職業生活とはそれを吾等の同一信海と混同するを得ないのであるからそれを引離すことはできぬ。もしそれを引離して安住の天地を得やうとするならばそれは自らを俳優化して「人生宗教」を覆障せしめよう。世間虛假唯佛是眞はまことに內心信樂開發の極促に名づけられたのである。

戒と信、道德と宗教、俗諦、眞諦、かく別たしむるものは「人」ある故であつて「自分」の故ではない。今は銘々の運命について考へてはゐられぬのである。不逆の「人」を思ふ必至の感激より躍り出で「うちてしやまむ」と誓はしめよ！(三、五)